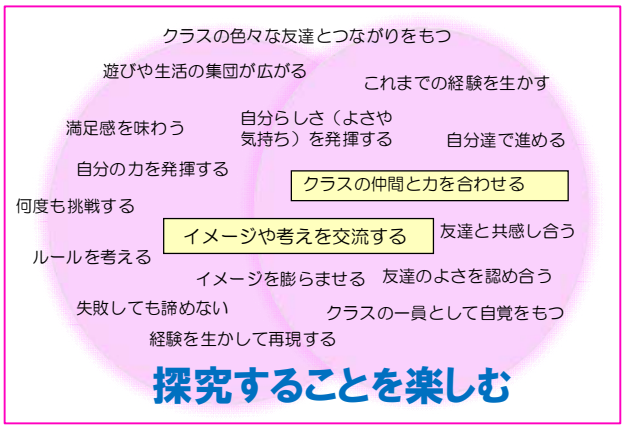
事例4:「レストランごっこをしよう」 5歳児(10月)

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)との関連
❸協同性　❽数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚　❾言葉による伝え合い

架け橋期のカリキュラムとの関連
(遊びの中で経験させたいプロセス)



これまでの姿

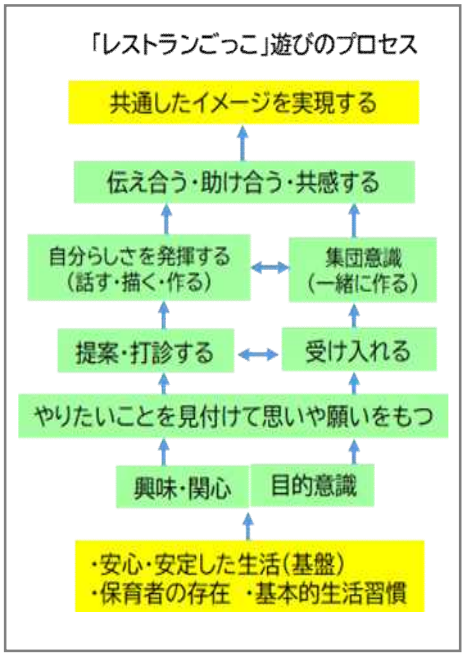
・子供達は友達を誘って思いを伝え合いながら、自分達で集めた自然物を使った製作を通して、秋ならではの遊びを楽しんでいる。
・ある日、絵本で自然物を使ったお店屋さんを見て、「やってみたい」「集めたどんぐりで作りたい」と、さっそく食べ物やメニュー表を作り始めた。

◎ねらい〇内容

◎友達と共通の目的に向かってイメージを伝え合い、工夫したり試したりしながら秋の自然物を使って遊ぶ楽しさを味わう。
〇友達同士で思いや考えを伝えたり受け入れたりしながら、助け合って作る。
〇文字やものの形に興味をもち、まねて書いたり工夫して飾ったりする。
〇やりたい遊びに向かって、自分なりの工夫を提案したり友達と丁寧に作ったりする。

遊びの様子(番号:10の姿との関連)	★環境の構成　〇保育者の関わり
A児が❾「お店の看板も作らなくちゃね」と言うと、B・C・D児も「名前も決めなくちゃ」、「何にしよう」、と相談しながら、保育者に「明日段ボールを用意していてね。看板作るから。」と伝え、続きは翌日にすることになった。 次の日、登園するなりC児がB児に❸「名前だけど、『木の実レストラン』にしてもいい？」と尋ねた。するとB児は「いいよ。 でも、Dさんが来たら変えたことを言わないと。」と話し、 D児が登園するなり、駆け寄って名前が変わったことを笑顔で伝えた。D児も「いいよ。」と言って、準備した段ボールを手に、看板作りが始まった。 C児が❽「私、店の名前書く。」と言うと、B児が「私も書きたい！」と伝えたため、C児は「じゃあ、半分ずつ書こう」と言って、2人で並んで仲良く書き始めた。 B児は「『れ』ってどんなに書くんだっけ？」と言いながら、急いでひらがな表を見て戻り、間違わないよう真剣な表情で名前を書いていた。	★看板作りに必要な素材(木の実や枝・落ち葉、段ボール紙等)や道具(ペン等)を幼児が目につきやすい場所に準備しておく。 〇互いの考えや思いを、伝えたり聞き入れたりして実現しようとする姿を認め、自分達で遊びを進める楽しさや充実感を味わえるようにする。 ★文字への関心が高まってきていることから、ひらがな表を目の高さに掲示しておき、使いたいときにすぐ見られるようにしておく。

遊びや学びのプロセス（10の姿）



❸協同性
友達と一緒に、看板づくりという共通の目的に向かって考えたり表現したり、協力したりしてやり遂げた充実感を味わっている。

❽数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
店名の看板を作ろうと、分からないひらがなはひらがな表で自ら探しながら、友達と一緒に丁寧に書こうとしている。

❸協同性
考えた名前の変更についてすぐ打診したり、相手の考えを受け入れたりして、一緒に遊ぶ友達の気持ちも大切にしながら楽しく遊ぼうとしている。

❾言葉による伝え合い
自分なりのアイデアを友達に伝えたり、相手の話を注意して聞いたりしながら、目的に向かって遊びを進めている。

❷自立心
絵本で見たお店屋さんを実現するため、『木の実レストラン』看板を作ろうという共通の目的をもち、分からない文字も諦めずに自分で調べて書いたり、イメージを伝え合い協力して自然物で飾ったりして、根気強く看板を仕上げたことで達成感を味わっている。

小学校教員の気付き

◆**幼児主体**の看板作りのプロセスで、**話し合う力や思いやり、文字や形への関心が大きく育まれている。**小学校でも**児童理解から、主体的に課題解決する授業づくりにつなげた**い。

◆伝え合う育ちから、絵本で共有したレストランごっこの**目的に向かい、協力**して看板を作ろうとしていた。保育者が見守りながら、**幼児が必要な時にさりげなく援助**している。

◆**子供が何に興味をもっているか、何をしたいと思っているのか**など、一人一人に寄り添った見取りをしている。
　自分たちの実現したいことを達成しようと、**考える姿がたくさん見られた。**

保護者への発信ポイント

◆保護者に、幼児が**夢中になっていることをお便りなどで伝える**ことで、ごっこ遊びに必要な材料を、**「家庭から持ってくる」という行動**にもつながります。それが**家庭での会話のきっかけ**になり、関心をもってもらうことで、幼児の**自己肯定感を高める**ことにつながります。